

神奈川県教育長賞

「忘れられない味」

茅ヶ崎市立松浪中学校
3年 栗原 那綺

太陽がキラキラと照りつけていた。私は、温度計片手に、担任の先生とカブトエビをつついていた。小さい足をチョコチョコと動かしながら這い回るその姿は、とても愛らしく、学年中の人気者だった。青々としたお米が黄金色に染まるとき、どこに身をよせてしまったのか、姿が見えなくなってしまった。

私が卒業した小学校は、屋上に田んぼがあり、毎年五年生がそこでつくったお米が年に一度給食として出ていた。学校の名前に因んで「汐小米」と呼んでいた。低学年の頃は、普段食べのお米と品種が変わる訳でもなく、特別おいしいと感じることはなかった。

五年生になり、作業が始まったのは、桜の散る頃だった。学年全員で屋上に上った時に見た田んぼは、昨年先輩達の足跡がそのまま残っていた。乾ききって、地面のように固い土は、シャベルで耕そうとしても、ささらない。全体重をかけて掘れたのは一掘り。小学生にしては、大変な重労働だった。夏でもないのに、汗がポタポタと垂れ落ち、作業が終わる頃には、シャツがびしょぬれになっていた。

燕が空を舞う頃、田おこしという作業を行った。作業に取りかかるには、決死の覚悟が必要だった。率先して泥沼の田んぼに入り、自らその泥を手でもみ込むのだ。何人かの友達と一緒に、沼地に足を踏み入れた。温くて柔らかい土が足を包み込んだ。思いきり手を田んぼにつっこんでみた。爪に土が入り込んだ。しかし、今までに触ったことのない感触が楽しくて、何度も何度も繰り返した。

五月雨が降る頃、丹精込めて耕やした田んぼに、青々とした苗を植えながら、黄金色の実を想像していた。植わった苗は、風が吹く度に、ゆらゆらと踊っていた。それから、田んぼの水温を管理しながら、その生長を見守った。その頃だった。あの人気者が姿を現したのは。田んぼやお米に有益だと知れば、増々可愛いかった。夏休みの間、その人気者は、大活躍してくれた。その頃には、お米は苗の何倍にも生長していた。穂先についた小さな花が、涼風に揺られてきらめき、サラサラとした軽快な音楽を奏でた。

数ヶ月経ったある日、ついに収穫の日が来た。屋上に上るなり、眩しい限りの黄金の光が私達を歓迎した。お辞儀をした稲穂達が秋風と調和し、言葉では表現し難い濃厚なハーモニーが屋上中に響き渡った……。一つ一つの稲が太く重く、立派に生長していて、収穫は少し大変だった。そして、収穫後には、一面に、私達の足跡が残った。「ありがたい」。田んぼへの感謝の気持ちを残して、屋上を去った。収穫した米は、脱穀や精米をした。給食に出てくる日が、とても待ち遠しかった。

ついにその日が来た。年に一度出てくるそのブランド品、汐小米は、白く、キラキラと輝いていた。湯気からは、おいしそうな匂いが漂っていた。そこには、私達の思い出全てが詰まっていた。そして、米粒の一粒一粒が米作りに関わってくれた人達の顔に変わる。あのカブトエビの姿までもが……。口の中に入れて、噛みしめる度に、嬉しき、感謝の気持ちが溢れ出てきた。今こうして私が命を繋げていけるのは、沢山の人の思いがこもった「結晶」があるからなのだ。

青々とした緑色が風に吹かれて、舞い踊っている田んぼを見ながら、四年前のあの時を思い出す。あの日から欠かさず感謝の気持ちを忘れず、今日も私は、炊きたてのお米を、「いただきます」。